
W

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W

【Nコード】

N0284I

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

中学3年生の夏、一樹と美希は両思いなのだが、意地を張ってしまい、美希は一樹の双子の弟の総二郎と、一樹は美希の妹の美羽とそれぞれ付き合ってしまうことに……。10年後、長じてそれぞれのカップルは結婚することになるのだが、不動産屋に薦められ、隣同士のマンションを購入することになる。しかしある日、とうとう一樹と美希が一線を越えてしまい、総二郎は苦悶する。「ならば、いそのこと毎月第一金曜日はお互いのパートナーをとりかえないか？」それが、苦悶の末に総二郎が出した結論だった!!!

——— そのそも・・・

これが、このクソややこしい話の発端となったわけである———

それは甘く酸っぱく切ない、ある少女の思い出なのである。

年の頃なら、14か15。

少女は恋愛があまり得意でない。

見るからに真面目そうな面持ちで背伸びをし、一生懸命に体育館を覗いている。

白い半袖のブラウスにはきちっとアイロンがあたっており、背中まで伸びた美しい黒髪はきちんとおさげに編みこまれている。

楚々とした風貌は好感をもてるのだが、如何せん少々鈍臭いのが、玉に瑕？な彼女である。

そこで行われているのは、バスケット部の地区大会の決勝戦。

中学3年の夏、それは彼らにとって最後の夏なのであった。

背番号7を身に着けた、勝気そうな少年が宙を舞い、放ったボールが鮮やかな弧を描く。

少女は胸元で手を握り締め、祈る。

「はいれ！」

蒸せかえるような熱気が体育館を包み、刹那割れんばかりの歓声が起る。

土壇場の逆転勝ち。

少女は興奮した観客に弾き飛ばされ、グラウンドに尻餅をつく。

仕方なく、彼女は汚れた手と制服を洗うべく体育館の裏にある水道へと急いだ。

なぜだか涙が溢れて止まらなかった。

この頃、少女はどうかやら初恋というものを覚えたのらしいのだが、
どうにもそれは御しがたい感情で、それを素直に表現することもで
きず、ただ物陰からそつとバスケット部のエースを見つめ続けるという、
少々ストーカー的なというか、完全な片思い状態であった。

「おい、美希！」

背番号7がいる。

気分よさげに、少し興奮しているのか鼻を膨らませる。

「勝ったぜ！」

「うん、おめでどう」

少女は泣き笑いの顔で少年に祝福を述べる。

そのとき、遠巻きに見ていた女子の数人がやってきて少年にタオル
を渡す。

「あの・・・これ使ってください」

どうやら後輩と思しき少女たちに、少年はにこやかに対応する。

このとき少年は少し調子に乗っていた。

若さゆえの傲慢というやつか・・・。

普段あまりモテナイ男が、ちよつと女子に好意を持たれたときに、
あつぷあつぷな状態になり、引き起こしてしまう『オレはモテるん
だぜ！』というメッセージを暗に含んだ微妙な牽制球。
それを見てドン引きしてしまう女子は結構多い。

「一樹って、モテるんだね」

少女の顔が苦痛に歪む。

その表情を見てとって、一樹は意地悪く微笑を浮かべる。

「おい美希、お前俺のこと好きだろ？」

耳まで赤くなった美希を少年は余裕で眺める。

「お前が、俺のことをどうしても好きっていうんなら、付き合っ
てやっても・・・」

少年は腕を頭の後ろに組んで、ニヤニヤと少女を見つめる。

青い！青いぞ少年！！！！

「ち・・・ちがうもん」

少女は俯き頭を振った。

それが、少女のできる精一杯の抵抗だった。

少年は顔色を変える。

「うそつけ！お前試合中俺のことばかり見てたじゃないか！」

「う、自惚れないでよ、誰があんたみたいなサル頭のことなんて好
きになるもんですか！！！！」

売り言葉に買い言葉、ええい、あとはどうにでもなれ。

「さ・・・サル頭だと！！！！」

少年は真っ赤になって怒り狂う。

「じゃあ、お前は誰が好きなんだよ！」

「あたしは・・・」

あたしは総二郎が好き！」

窮鼠猫を噛む???

その言葉は明らかに少年の心を強かに打ちのめした。

KOである。

少年の瞳になんともいえない苦痛の色が浮かび、

二人の間に微妙な空気が流れたのだった。

「あたしは総二郎が好きなのよう！！！！」
気付けば少女は大声でそう叫んでいた。

一拍置いて、体育館の横に位置する美術室の引き戸が開く。

古びてはいるが、どこか趣のあるこの美術室から、一樹と同じ顔の少年が茹蛸になって顔を出す。

「あ……あの、美希ちゃん、今のって本当？」

油のきれたブリキの人形よろしくである。

「あ……総ちゃん……あの……」

少女もつられたように赤面し、思わず口ごもる。

「僕、もうずっと美希ちゃんのことを好きだったんだ!!!」

感極まった総二郎少年が声高に叫ぶ。

サッカー部、野球部、陸上部……以下略の多くのギャラリーが

彼らを取り囲む。

少女は腹をくぐった。

一拍置いて息を吸い込む。

少女は一樹少年をきつく見据え、

「そうよ、あたしは総二郎が好きなの!!!」

その瞬間、1組のカップルが生まれたことを誰もが喜び、拍手喝采と様々な野次が飛んだ。

———嗚呼、試合に勝って勝負に負けたというのは、このことかもしれない。———

少女は空を見上げる。

空は青く、どこまでも高かった。

一樹は一瞬硬直し、顔色を失うが次の瞬間真っ赤になって怒鳴った。

「ああそうかよ！」

だったらお前らとつと付き合えば？」

「ええ、ええ。そうしますとも！」

あんたに言われなくても、こっちもそのつもりよ！」

思ってもみない言葉が溢れだして、自制できない。

少女は岩石に頭を打ち付けたい気分だった。

総二郎の瞳が潤む。

完全に恋をしている乙男のそれである。

総二郎の手が、少女の掌を包みこむ。

「僕と付き合ってください」

少女の背中に冷たい汗が滴り落ちる。

自室ベッドに寝転びながら昼間の出来事を思い、少女は激しく自己嫌悪に陥る。

「ダメだ、やっぱりきちんと総ちゃんと話をして誤解を解かなくちゃ」

美希はベッドから重い頭を上げると、おぼつかない足取りで、部屋を後にした。

家の勝手口から外に出て、いつものごとくにお隣の敷地への無断侵入よろしく足を踏み入れる。

総二郎は二階にある自室の窓を開け、ぼんやりと夜風にふかれていた。

視界に美希の姿を認めると、少し頬を紅潮させ、嬉しそうに手を振った。

「僕まだ夢をみているようなんだ」

美希は言葉を飲み込む。

「小さい頃からずっと、美希ちゃんのことが好きで……だから美希ちゃんが、今日僕のことを好きっていつてくれて本当に嬉しい」

夜風が頬を撫でる。

不思議とそれは嫌な感覚ではなかった。

それは総二郎の優しい瞳に見つめられる感じと似ていた。

思えば、幼い時分から美希はその感覚を心地よいと感じていたのかもしれない。

幼いながらに、そこには一種の愛情があった。

故に美希は決して総二郎を傷付けたくないと思った。

総二郎の唇が美希に重なる。

それは不意のキス。

総二郎は少し震えていた。

「あっ……」

美希は凍りつく。

「おい、総二郎」

風呂次お前の番だぞ………」

パンツ一丁で一樹が総二郎を呼びに姿を現し、
凍りつく……。

それは中学3年生の一樹少年には、少々刺激がきつかった。

自宅の裏庭で、キスをする男女。

男は自分の双子の弟で、女は自分の初恋の女の子。

てつきり彼女は自分のことが好きなのだと自惚れていた。

しかし彼女は自分ではなく、弟の総二郎が好きなのだといった。

一樹少年は大いに自尊心を傷つけられ、あまつさえ二人のキスシーンまで見てしまったのだ。

一樹少年はこのときはまだキスを経験したことがなかった。

今まで、全てにおいて勝っていると思っていた弟に先を越されてしまった。

なんだか妙に男のプライドが傷ついている。

嗚呼————晴天の霹靂

それは一樹少年にとって、ほろ苦い中学3年生の夏の思い出であった。

「お姉ちゃん、どうしよう私……！」

美希は英語の教科書から目を離すと、勢いよく部屋に飛び込んできた妹の美羽に視線を移す。

「何？どうしたの？」

美希は握っていたシャーペンを机の上に置いて、妹に向き直る。

「私、今日橘先輩に告白されちゃった！」

「橘先輩って、どっちの？」

美希の心臓が跳ねる。

「もちろん、兄の一樹先輩よ」

美希の思考回路が一時停止を告げる。
なんですと？

美希は天井を見上げた。

「ちょっと、やだ

お姉ちゃん何で泣いてるの？」

美羽が取り乱す。

「え？あたし泣いてんの？」

美希は必死で取り繕う。

「ちがう、ちがう、目にゴミが入っただけ、

あははゝ 嫌だなあ。もう」

それが美希の精一杯だった。

部屋を出て、少し外の空気が吸いたかった。

今が夜でよかったと思う。

通行人に泣き顔を見られなくてすむから。

ええい！今日は思う存分泣こう！

いっぱい、いっぱい泣いて、コンビニでチョコレートケーキを買って帰るのだ。

「今日はあたしの失恋記念日」

そうつぶやいて強がってみても、やっぱり涙はとめどなく溢れ、頬を伝う。

涙腺が壊れたかと思うくらい、盛大に泣けた。

そして大いに失恋の余韻にひたり、それこそ幼稚園時代から始まる自分と一樹の思い出に浸りきった。

「おい！ブス美希！！！」

そうだ、小っちゃい頃から一樹は口が悪く、よくそう言って美希と喧嘩ばかりしていた。

そのくせ、美希がいじめられると、野良犬であろうが、年上の悪ガキであろうが、誰彼かまわず立ち向かっていった。

「おい！ブス美希！！！」

自転車の前カゴにバスケットボールを突っ込んで、一樹が目の前に佇んでいる。

「げっ、お前もしかして泣いてんのか？」

一樹は少し後ずさる。

「あたし、失恋しちゃったんだ」

そういうと美希は少し楽になったような気がした。

「あたしがずっと好きだった人は、実はあたしの妹が好きで、付き合うことになっちゃった」

「ちがう、そうじゃない！

俺はお前が……！」

「……
だけどお前が総二郎のことが好きだっていうから……あの……」

一樹は耳まで赤くなって下を向く。

その時————

「兄貴！コーラなかったから、アクエリアスでいい？」

総二郎が満面の笑みで、二人の間にあらわれる。

「あっ美希ちゃん」

そう声をかけ、心配そうに美希の顔を覗き込む。

「どうしたの？泣いてたの？」

美希は咄嗟に顔を背け、否定する。

「あっ違うの。そうじゃなくて

目にゴミが入っただけ」

一樹はプイと顔を背け、自転車に乗る。

「ごめっくり！」

不機嫌にそう言いおいて、走り去ると唇をかみ締め、低く呟く。

「あんの、バカ女！」

終業式を終えて、美希は帰路につく。

とりあえず服を着替え、さきほど大量にもらった夏休みの宿題を机の上に並べ、軽く中身に目を通す。

「さてと、これから片付けようか」

刹那、部屋の扉がすごい勢いで開く。

「お姉ちゃん！どうしよう」

美羽は紅潮した頬を汗に濡らし、肩で息をしている。

「な・・・なに？
どうしたの？」

「お姉ちゃん、私ね、一樹先輩にデートに誘われちゃった」

美希は一抹の寂しさを覚えたが、努めて冷静を装い美羽を見つめる。

「美羽は一樹のこと、好き？」

「そりゃあ、好きよ。

成績優秀、眉目秀丽、運動神経抜群が三拍子そろって、
一樹先輩女子の人気すごく高いんだよ」

美羽は熱っぽく瞳を潤ませ、完全に王子に恋する姫になりきっている。

「絶対、誰にも渡さないんだから！！！」

美羽は拳を握り締める。

「で、あんたたちは一体何処でデートとやらをするの？」

「花火大会に一緒に行こうっていわれたの」

「そっか、よかったじゃない」

美羽は美希のTシャツの裾をしっかりと握った。

「ちょっと、やだやめてよ。のびちゃん」

「お姉ちゃん、お願い！一緒に行って」

美希の思考回路が停止する。

「はい？なんであたしが???」

美羽の手に力が入る。

「だから、Wデートしよ。

お姉ちゃんと総二郎先輩、

私と一樹先輩のWデート」

「はい？」

「だって、男の人とデートなんて初めてで、怖いんだもん」

美希は眩暈を堪えつつ、盛大にため息をついた。

日が翳り、少し気温が少し低くなったところ、美希は隣の庭にいた。

総二郎はホースで庭に水を撒いている。

プランターに植えられたミニトマトが赤く色付き、

総二郎は、食べごろのものをひとつとって美希の口に放り込んだ。

「ん、美味しい」

美希が微笑む。

どこから見てもそれは幸せそうなカップルだった。

「そう？よかった。

去年は皮が分厚くてあまり美味しくなかったから、
今年は肥料を変えてみたんだ」

そして、美羽の事の経緯を話した。

「ごめんね、総ちゃん。

変なことに巻き込んでしまった」

「なんで？僕は嬉しいよ。

おかげで美希ちゃんと一緒に花火が見られるんだから」

気の毒そうに総二郎を見つめる美希の耳元に

「美希ちゃんの浴衣姿、楽しみにしてるよ」

と囁いてよこした。

予想外の総二郎の行動に、美希は思わず赤面してしまった。

湯船の中にオイルを垂らすと、なんともいえない芳香が広がった。

お母さんの友人のフランス土産らしいのだが、今日は特別に使用許可がでた。

美希は洗髪を終え、念入りに身体を洗う。

湯船に浸かる美羽が、じっと美希を見つめる。

「いいなあ、お姉ちゃん
胸大きくて」

美羽は湯船のお湯を器用にすくい取り、掌でピツと飛ばす。

「あっくら」

水滴が美希の顔にかかる。

「やったな」

美希は背後から美羽を羽交い絞めし、そつと美羽のふくらみの頂に触れる。

「どれどれ？」

でも前より少し大きくなったんじゃない？」

「本当？」

美羽は顔を輝かせる。

美希はバスタオルを身体に巻いてすばやく髪をアップに結い上げる。奥の和室では、すでに母が娘二人分の浴衣を用意している。紺地に大輪の牡丹がデザインされており、それと同じ深い紅の帯を締める。

数年前、祖母が仕立ててくれたものだ。

その横に美羽の浴衣が衣紋賭につるしてある。

白地に薔薇がデザインされ、ピンクの帯にレースをあしらったものを一緒に結ぶそうだ。

この日のために美羽が両親にねだり買わせたらしい。

美希はなんとなくそれを見やり、小さくため息をついた。

美羽はもう一枚浴衣をもっている。

自分と同じときにおばあちゃんが仕立ててくれたものだ。

おばあちゃんが美羽の為に仕立てた浴衣を美羽はまだ一度も着たことがない。

美希はおばあちゃんの浴衣が少し可愛そうだと思った。

一足先に支度を終えた美希はなんとなく庭に出てみた。

日はだいぶ翳ってきたものの、まだ西日がきつい。

ちょうど、家からでてきた一樹を目が合うと、一樹はぎこちなく美希の傍に行き下を向く。

「あの、似合うかな？」

美希はなぜだか、一樹にそう聞いてみたかった。

一樹はプイと横を向き

「ふん、馬子にも衣装だな」

とぶっきらぼうにこたえる。

美希はしゅんと肩を落とす。

「そっか」

一樹は美希の予想外の反応にうろたえる。

「い・いや、あの、それは似合わないってことじゃなくて、むしろ、似合ってるっていうか、ああうまく言えねー
お前はいつだって、かわ・・・い・・・い」

一樹は赤面し口ごもる。

「美希ちゃん！」

すごく可愛い、よく似合ってるよ」

一樹が凍りつく。

総二郎は庭でつんだばかりの真紅の薔薇を器用に美希の髪に結わえた。

それは、色白の美希によく映えた。

一樹が鼻を鳴らす。

「何やったって、かわらねーよ
ブスはブスだ」

「ちょっと、兄貴！」

そこに準備を終えた妹の美羽が姿を現す。

「おゝ美羽ちゃんはやっぱり可愛いなあ、
姉のブス美希とは大違いだ」

と悪態をつく。

「何よ、悪かったわね。 バカ一樹！
あんたこそ優しい総ちゃんとは大違い！！！！
ばゝか！ばゝか！！」

美希は顔をしかめ舌を出す。

だけど今手をつないでいるのは、総二郎とあたし、一樹と美羽。
そのくせ視線はずっと一樹を追っていて、全身がアンテナになっている。

———そしてその関係とやるせなさは、10年後の今も続いている
———

あれから、10年の歳月が経過し、少女は25歳になった。
無論少女だけでなく少年達も25歳なわけで、そろそろ結婚適齢期を迎えようとしていた。

中学生カップルが別れずに、結婚にいたるなど、絶滅危惧種の朱鷺の繁殖より難しい話なのだが、なぜだか総二郎と美希は今もまだ続いている。

美希の左手の薬指には、総二郎からもらった婚約指輪が精彩な輝きを放ち、存分に存在感を発揮している。

「えっと、式の話なんだけど」

総二郎は箸を止め、鞆から式場のパンフレットを取り出す。

会社帰りに近所の和食の創作料理屋で待ち合わせ、こうしてごはんを一緒に食べているわけなのだが、結婚式の話になると美希の胃がちくちくと痛んだ。

「式は二人きりで挙げたいわ」

そんな心底からの願望を一応伝えてはみるものの、決して総二郎は首を縦にはふらない。

「そういうわけにはいかないよ。」

僕にだって仕事や親族間の付き合いがある。

勿論君の家族や親族とだって、これからもうまくやっていかなきゃならないんだから、それ相応のことはきちんとしておかないと」

総二郎は少し困り顔になる。

美希の携帯に着信が入る。
妹の美羽からだった。

「あっお姉ちゃん？
式場決まった？」

「まだよ」

「だったら、一緒に式挙げちゃわない？」

結局、総二郎さんと一樹さんが兄弟で、お姉ちゃんと私が姉妹
なんだから、親戚も2回集まるの大変 じゃない。
だったら、合同でW婚ってどう？」

え？嫌、絶対嫌。

「ちょ、それは、ちょっと！！！」

一瞬の間の後、通話は一方的に打ち切られた。

引き戸が開かれ、店に一組のカップルが入ってきた。

「あっお姉ちゃん！」

女は嬉しそうに美希たちに手を振った。

「それ、いいね」

総二郎と美羽は意気投合し、勝手に話しを進めている。
あたしは終始下を向き、一樹はすごいピッチで日本酒を飲んでいる。
30分後には話はすでに決定となり、お互いの両親に一方を入れた。
両家の親は費用が節約できるのを手放しで喜び、すでに何軒かの親
戚には電話をしてしまったということだった。
もう後には引けない。

あたしは一樹の日本酒をひったくり、一気に飲み干した。

結婚式場の華やいだ雰囲気は、誰しもの心を晴れやかにする。着飾った招待客の群れ、広いロビーに、はしゃぐ子供たち。

式当日、控え室には花嫁が二人。

妹の美羽はこの上なく晴れやかな表情で挨拶に来た親戚に應對している。

美希は胸につかえた棘が未だにとれていない。

彼女には10年間誰にも秘め続けた感情があった。

この期におよんで、傷心な自分を自嘲する。

鏡に映った自分の顔が妙に情けない。

不意に鏡に人影が映る

「総ちゃん、どうかな、似合う？」

美希は少しはにかんでみる。

刹那、鏡に映った総二郎の顔が少し歪んだように見えた。

美羽はウエディングドレスを友人達のもとに見せに行き、偶然メイクさんや美容師さんたちも席をはずしている。

「ああ、似合うよ」

そう言って総二郎はそつと美希を抱きしめた。

「総ちゃん？」

不自然な間の後

「……ばか、俺だよ」

と鏡の中で舌を出す。

「はあ？ 一樹！！！」

「美希きれいじゃん、ドレスよく似合ってるよ」

一樹に抱きすくめられ、美希は少しとまどう。

「あ・・・ありがとう」

それは一樹にずっと言ってもらいたかった台詞だった。
涙が頬を伝う。

マスカラがとれて黒い涙の跡がつく。

「今更かもしれねーけど、やっと言えた。

この台詞言えるようになるまで10年かかった」

一樹は今まで見たなかで、一番穏やかな顔をしていた。

「お前、ちゃんと幸せになれよ。

お前は俺の大切な幼馴染で、今日からは俺の家族になるんだから
な」

美希はメイクが崩れるのもかまわず、号泣した。

メイクさんが戻り、その顔を見て啞然とする。

「すみません、式の前で感情が高まってしまって」

美希はずびーっと鼻をかんだ。

スタッフは泣きはらした顔美希の顔を早急に冷やし、手際よく処置

を施してゆく。

さすがはプロだ。

ものの10分も経たないうちに、美希はなんとか見られる顔になった。

チャペルではパイプオルガンで厳粛にアベマリアが奏でられ、2組のカップルが登場した。

スタンドグラスに日が当たり、十字架が浮かび上がる。

片言の日本語をしゃべる外国人が、誓いの言葉を促す。

「汝、汝の病めるときも健やかなる時も、

汝の夫、橘総二郎を愛することを誓いますか？」

その言葉は、美希の心に重かった。

だけど、一生涯その隣に立つ総二郎を愛そうと思った。

「はい、誓います」

光の十字架をしっかりと見据え、美希は本心からそう誓った。

「あっ、お姉ちゃん？」

不動産屋さんがね、マンションを買わないかって言ってきたよ。

二戸同時に買ってくれるんなら、値引きに応じてくれるっていうし、

家賃を払い続けるのも、もったいない話でしょ？」

嫌だ、そっとしておいて。

何が悲しくてあいつとあんたの家の隣に住まなきゃならんのですか！

新婚で、それなりに上手くいってるんだから、もうお互いに干渉するのはやめましょうよ！……！！
というのがあたしの本心で、

「あつ、総二郎さんにはもう電話いれたから。
随分乗り気だったわよ」

妹は一方的に通話を切った。

夕食の晩酌を熱燗で差し出すと、例によって総二郎はことのほか乗り気だった。

「いいじゃないか、是非明日見に行こうよ」

「今はまだ新婚なんだし、二人の時間を大切にしたいわ」

「そう？でも家賃だってばかにならないし、子供ができたら何かと人手が必要だろ？」

なら、兄さん夫婦の隣に住んだら、お互いに安心じゃない？」

総二郎は美羽から送られてきたFAXに目を通す。

「この立地で、この値段。」

これを逃すと二度と手に入らないだろうね」

美希に口を挟む余地はなく、翌月にはそのマンションに引越した。

美希たちの部屋は10階に位置する。

さすが総二郎のほれ込んだ物件とあって、日当たり、景観、風通りなど申し分なかった。

引越しの片付けを終え、隣にお邪魔する。

美希たちの引越しを祝うべく、一足先に越してきた美羽たちが食事に招いてくれたのだ。

リビングの奥に寝室が位置し、大きなWベッドが据えられていた。美希はなんとなくそれを見て赤面してしまう。

リビングのテーブルの上にはすでに美羽の手料理が所狭しと並んで

いる。

「たくさん食べてね」

美羽が屈託なく笑い、料理を取り分ける。

終始和やかに食事は進み、午後9時を回るころには美希たちは自室へと引き揚げた。

総二郎はリビングで横になりテレビを見ている。

美希は疲れていたので、寝室で横になっていた。

うとうとと夢見心地の最中に、微かに音がする。

誰かのあえぎ声？

そして思い出す。

この壁を隔てて真向かいが、一樹と美羽の寝室であったことを。

美希は全身が火照るのを感じた。

一樹に抱かれる美羽。

美希は嫉妬を覚えた。

隣の部屋に、壁一枚を隔てて夫がいる。

美希は一樹に抱かれる自分を想像し、声を殺して絶頂に上り詰めた。

「ねえ、お姉ちゃん、実は私今日友達と出かけることになっちゃって、

今夜一樹さんの分も夕食頼めないかな？」

美希はできるだけ、さりげない風を装った。

「ええ、いいわよ」

今夜は夫の総二郎は出張で帰らない。

美希は頭に浮かぶ邪な考えを打ち消すべく努力した。

何を———考えているんだ———

一樹の好物は肉じゃがだ。

本当はもうずっとあたしが一樹に作ってあげたかった。

美気は料理の腕は妹の美羽より数段上だと認識している。

実際美希には絶対舌感なるものがあって、一度食べた味はそっくりそのまま再現することができた。

それになんたって、一樹に関しての思いには年季が入っている。

10年間一樹に対してアンテナを張り巡らせ、今日に至るわけで、煮えたぎったこの感情はもう自分でも制することができない。

料理の仕込みを終えた美希は、風呂に入って念入りに身体を洗い、真新しい下着を身に着けた。

一樹は濃い化粧や香りを好まない。

薄くメイクを施して一樹の帰りを待つ。

午後7時を回るころ、一樹は帰宅した。

「ただいま、おう来てたのか」

キッチンに美希の姿を見つけ、ぶっきらぼうにそういった。

「美羽は？」

ネクタイをはずしドカッと椅子に腰掛ける。

「なんか、友達と出かけるって」

何気ない風を装い、料理を温める。

「先にお風呂はいる？」

「おお」

気のない返事とともに、一樹は風呂場に向かった。

湯船に浸かって、浴室テレビを見ている。

美希は意を決して風呂場へと向かう。

髪をアップにまとめ、衣服を脱ぎ捨て、浴室の扉を開いた。

「背中、流そっか？」

一樹は足を滑らせ、浴槽で溺れ強かに水を飲んだ。

「お・・・おおおお前」

声が震える。

そこには一糸まとわぬ弟の嫁が立っているのだ。

「あたしを見て」

「ば・・・か、お前なに考えて・・・」

美希は啞然とする一樹を抱きしめた。

一樹の一物が反応する。

「あ・・・っやめて・・・」

だ・ダメ、やめて・・・

い・・・いや、止めないでくれ・・・」

行為の後で美希は頭の芯が甘く麻痺しているのを感じた。

禁断の果実は確かに甘く美味しかった。

やがて甘い麻痺の後には『恐れ』がきた。

夫と妹に対する罪悪感、何よりも事が露見することが恐ろしかった。

——あたしは、一体なんということをしでかしてしまったのだろう——

その夜、美希はベッドの上で一睡もできなかった。

翌日の夕方、総二郎は予定どおり出張から帰ったが、すぐに妻の違和感に気がついた。

動作のひとつひとつがぎこちなく、抱きしめても石のように硬い。

それがもっとも顕著に現れたのが、夜の営みのときだった。

美希の膣は、ちっとも潤わず、無理に挿入しようすると、痛みのあまり叫び声を上げ、飛びのいた。

美希は泣きながら、全てのことを夫に告げた。

翌日、総二郎は電話で美羽を呼び出した。

お互いの職場の近くにあるカフェで、総二郎はすでにホットコーヒーを注文していた。

ほどなく美羽が現れ、彼女もホットコーヒーを注文した。

「兄貴と美希のことだけど・・・」

美羽はポーチの中から煙草を一本取り出し、煙をくゆらせた。

「君、煙草はいつから？」

それは初めて見る美羽の顔だった。

なんとも物憂い、けだるさの中に彼女の疲れと痛みを見たような気がした。

「大学生のときに、一樹さんのほかに一人彼氏がいたのよ、でその彼が吸ってたのがこの銘柄だった」

その話もまた、初めて聞く話だった。

「そうなの？」

「女にはね、愛情タンクっていうのがあってね、それを満たしてもらえないと死んじゃうのよ」

「兄貴は、君を満足させられなかったの？」

「そうじゃないわ、私は彼でなくちゃ満足できない」

美羽はくゆる煙草の煙を寂しそうに見つめた。

「じゃあ、なぜ？」

「彼は、私のほうを見てくれないわ
いつもお姉さんばかり見てる」

いわば愛情の飢餓状態ね。私もあなたも」

総二郎には、痛いほど美羽の気持ちがわかった。美希もまた総二郎のことは見ていない。

彼女がいつも求めているのは兄の一樹であったのを、総二郎も知っていた。

しかしそれでも良いと総二郎は思った。

その微笑が偽りであったとしても、残酷な真実よりは幾分救いがあるように思えた。

「白状するとね、私は二人がこうなるように、仕向けたの。

そして、頭のどこかで一樹さんが私を選んでくれることを望んだ」

「矛盾してるね」

「そうよ、でもそれが女心ってもんなのよ」

落葉が秋の終わりを告げ、木枯らしが容赦なく吹きつけた。

総二郎は思わず身震いし、己の腕を抱いた。

ふと目の前に赤い十字架のネオンが目に入り足を止めた。

なんとなく扉を開けると、祈祷会のために数名が集まり、牧師の話を耳を傾けていた。

総二郎は一番後ろの席に遠慮がちに腰掛けた。

『すると律法学者とパリサイ人が姦淫の場で捕らえられた

ひとりの女を連れて来て、真ん中においてから、イエスに言った。

『先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。

モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。

ところであなたは何といわれますか』

ヨハネの福音書の8章の有名な箇所だった。

総二郎はイエスの中に自分を見ているような心境になった。

『あなたがたのうちで、罪のないものが一番最初に石を投げなさい』
総二郎の心の中には、一樹と美希を殺したいほどの憎しみがあつた。
しかし、二人の気持ちを知りながら、そこまで彼らを追い詰めた自分
に、果たして罪はないのだろうか？

祈祷会が終わった後、総二郎は帰路に向かいつつ堂々巡りを続けた。
そして結論を出した。

「自分は、相手を許すことはできない。

そして相手を裁くこともできない。

ならば、自分もその罪を犯し同じ土俵に立てばよいのではないか？」

そして兄に電話をした

——— 毎月第一金曜日は、お互いのパートナーを取り替えないか
？———

意外にも、美羽はその申し出をすんなりと受け入れた。

「へえ、面白そうじゃない」

あまりにもさっぱりとした妻の態度に、一樹は拍子抜けした。

「だけど、覚えていてね。

私はあなたとは絶対に別れないわ」

それは心を凍らせた女だけが見せることのできる氷の微笑だった。

総二郎は、部屋を出る前にいつものように美希を優しく抱きしめた。

「君は、その行為に罪悪感を感じることはない。

僕も、今夜君と同じ行為をするんだから」

愛してる、とは言わなかった。

彼女の重荷になることが分かっていたから。

自分の愛する者のもとへ行け。

それが自分にできる彼女への愛情の全てだった。

隣の部屋で美羽が総二郎を待っていた。

二人は今寝室にいる。

Wベッドに座りながら言葉を交わすことは、ない。

やがて壁一枚を隔て、美希の喘ぎ声が聞こえてきた。

最愛の妻が、今他の男に陵辱されている。

それは総二郎にとってそれは、キリストの磔刑に値するほどの苦痛だった。

「ばかねえ」

美羽の掌がそっと総二郎の耳を塞ぎ、その胸に抱きしめた。

その眼差しは悲しみの聖母そのものの慈愛に満ちていた。

空の色は重く、美希はなんとなく悟っていた。

アダムとエバは神が食べてはいけないという禁断の果実を食べたのだが、その代償に様々なものを失った。

神というものが存在するのなら、自分は必ず裁きを受ける。

そう思ったのは良心の呵責のせいだったのかもしれない。

携帯が鳴った。

総二郎の同僚からの着信で、総二郎が会社で倒れて救急車で運ばれたとの事だった。

———裁きを受けるのは、自分であるはずなのに、なぜ?———

美希の思考は半ば呆けていた。保険証と当面必要な入院の道具を一式揃え、美希はタクシーに乗り込んだ。

愛裏に思い浮かぶのは、総二郎の優しい微笑みばかりで、鞆を持つ手が不自然なほどに震えた。

「病名は胃潰瘍ですが、状態はかなりひどいです。

最善は尽くしますが、出血が多く今はなんとも言えません」

医師は気の毒そうに目を伏せた。

原因は過度のストレス。

言わずと知れたあたしのせいだ。

美希は瞳を閉じる。

なんとなく電気を使いすぎて落ちてしまったブレーカーを連想した。

美希はフラフラとおぼつかない足取りで総二郎の病室を後にした。

そこはキリスト教系の病院で、一回のロビーの横に祈祷室がある。

その中心に大きな十字架のネオンが青とも紫ともつかない優しい色を音もなく発している。

美希はその十字架のまん前の最前列の中央に腰掛けた。

他に人はいない。

美希は十字架を睨み付けた。

「神様、仏様とは申しません。

私が結婚式場のチャペルで、誓ったのはキリストの神のあなたですから、私はあなたに申し上げます。あなたは神で何事もあなたの前に隠せるものはないと思っています。ですから、あなたは私が犯した罪をご存知のほずです。私は結婚式であなたに誓った誓いを果たすことができずに誠実な夫を裏切りました。私があなたに裁かれ

ることは、正当なことです。しかし今私に裏切られた哀れな夫が命を失おうとしています。神よ、それは正当なことではありません。夫の代わりに私の命をお取りください」

それは、祈りというより精神的な格闘であった。

何時間もの間、美希はその場で祈り続けた。

それは自分の命をかけた祈りであった。

そしてそのとき、美希は確かに死んだ。

一樹への恋心を抱き、夫を裏切った美希は死んだのである。

そこにあるのは、自分の命を懸けて夫を救おうとする、妻の姿であった。

真夜中を過ぎた頃、その祈祷室にフラフラと美羽が入ってきた。

「お……お姉ちゃん、

総二郎さんが……」

美羽の瞳に涙が盛り上がる。

美希は今、総二郎の傍らでりんごを剥いている。

その回復ぶりは、医者も驚くほどである。

「年内には退院できるそうよ」

美希は夫に微笑みかけた。

「はい、あーん」

美希はりんごをフォークに刺して、総二郎の口に近づける。

総二郎が退院した後、美希は総二郎とともに実家に帰るつもりだ。そして自分たちが住んでいたマンションに実家の両親に住んでもらうことになった。

それでWは解消できても、自分が犯した罪が消えるわけではないが、今こうして総二郎の傍にいたことができる幸せを思う。

総二郎が一命を取り留めた後、美希は教会に通うようになった。そこで牧師婦人が言っていた。

「私たちは弱いものです。ですから私たちも毎日神に祈るのですよ。今日一日、私が夫だけを愛することができるよう、そして夫も私だけを愛してくれますようにと」

聖歌隊の歌うクリスマスキャロルを聴きながら、美希もまた心の中でこの祈りを唱えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284i/>

W

2010年10月10日15時27分発行